

CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

Contents

1. 春分の日
2. 林野火災
～春には特にご注意を
3. お天気よもやま話
～桜の開花 予想できるわけ



1 春分の日

今年の春分の日は3月21日ですね。「春分の日」を調べると、天文観測で「春分」が起こる日を「春分の日」としています。春分の日は、昼と夜の時間がほぼ同じと言われていますが、実際は昼の方が少し長いようです。今年の春分の日の東京での日の出は5時44分、日の入りは17時53分で、昼の方が18分ほど長いのがわかるかと思えます。昼が長くなる理由は、大気による屈折（実際より上に見えるため）や視角（太陽の上端が見えた時間が日の出など）などで少し昼が長くなるというわけです。

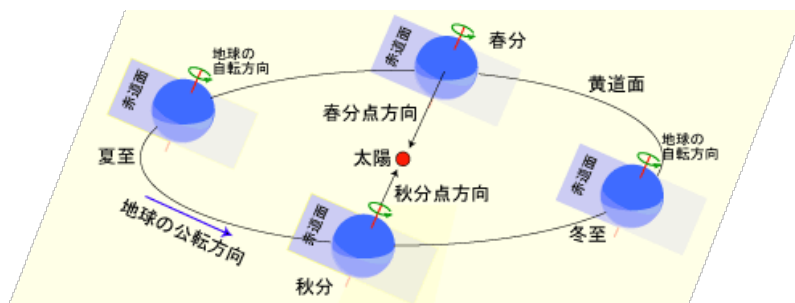
ところで、昼と夜の時間がほぼ同じ日は、春分の日の他に、秋分の日（今年は9月23日）の2回あります。この二つの日は昼の時間が同じなので太陽から受けるエネルギーも同じくらいのはずなのですが、気温を比べてみると大きく異なっています。例えば、春分の日の東京の平年値を見ると、最高気温が14.9℃で最低気温は5.6℃となっています。一方、秋分の日は、最高気温が25.8℃、最低気温が18.7℃です。最高気温、最低気温とも秋分の日が10℃以上も高くなっていますね。

この差は何から発生しているのでしょうか。簡単に説明しますと、地球上には多くの水と大気が存在しています。特に、水はあたたまりたり冷えたりするのに時間がかかるのです。大気や太平洋や大西洋にある大量の海水

が温まるのに時間がかかるので、春分の日にはまだまだ冬の影響を受けているのです。逆に、秋分の日はまだまだ夏の影響が残っているといえるのです。

ちなみに、今年の冬至（1年で最も昼が短い日）は12月22日ですが、東京の1年で最も気温が低い時期は1月下旬ごろで1か月のずれが見られます。また、今年の夏至は6月21日ですが、東京で気温のもっとも高い時期は8月上旬ごろとなっており1か月半くらいのずれとなっています。これは、梅雨等の影響もあると考えられ、この時期に梅雨のない沖縄の那覇の観測では、7月下旬が最も気温の高い時期となっています。

下の図は、太陽の周りをまわる地球を表しています。地球の地軸の傾きと大気、海がうまく調和して日本の豊かな四季をもたらしているのです。



出典：国立天文台ホームページ



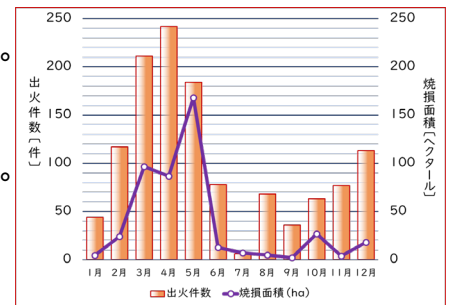
2 林野火災 ～春には特にご注意ください

3月になると北日本の多雪地を除いて、人々の戸外での活動が活発になります。この時期に注意しなければならないのが林野火災です。総務省消防庁の調べでは令和2年の林野火災は1239件で、約449ヘクタールもの広さの林野が焼失しています。図は令和2年の月別の林野火災の件数と焼損面積を示したものです。件数、焼損面積のいずれも春3月から5月に集中しています。

外国では落雷や異常な乾燥、高温状態の中で、自然発火による林野火災が起こるところもありますが、日本での林野火災の原因で多いのがたき火やたばこの火の不始末です。落雷などの特殊な事例を除けば気象は火災発生の直接の原因というわけではありませんが、乾燥状態や強い風はひとたび出火した時には延焼の危険を増大させます。気象の視点からは春は火災の広がり、特に林野火災にとっては十分に注意しなければならない季節です。「春一番」や「メイストーム」などの言葉で代表されるように春は強い風が吹きやすく、また空気の乾燥しやすい季節でもあります。山林や野原は新芽が出てくるころで、まだまだ枯れ草や枯木があちらこちらにあり、火災が起これば拡大しやすい環境です。

昭和以降、最大の林野火災といわれているのが昭和36年5月29日に岩手県下閉伊郡で発生したもので、次々と周辺に拡大して焼失した面積は山林など4万ヘクタールを超え、5人の方が犠牲となりました。この日は日本海北部から北海道を通過した発達した低気圧に伴う寒冷前線が東北地方を通り過ぎたあとで、瞬間で20m/sを超える強い西寄りの風が吹いている中での大火でした。

春になって各地で山焼きが行われます。また、山菜採りや狩猟などでも山に入る機会が増えてきます。庭先でのたき火なども油断は禁物です。乾燥した状態が続いたり、風が強まることが予想されている時には火の取り扱いに一層注意が必要です。



令和2年の林野火災の出火件数と焼損面積
出典：総務省消防庁「消防白書」

3 お天気よもやま話 ～桜の開花 予想できるわけ

多くの地域で開花予想や満開日等の発表の対象となっているのは「そめいよしの」(そめいよしのが生育しない地域では「ひかんざくら」「えぞやまざくら」を観測)です。種では増えず、接ぎ木等で増やしていったため、日本中の全ての「そめいよしの」は、ほとんど同じ遺伝情報をもつ「クローン」です。そのために、一斉に咲き、一斉に散っていくのです。

すでに今年も、いろいろなメディアが桜の開花予想が伝えられていますね。以前は気象庁が桜の開花予想も発表しましたが、



今は民間の気象会社数社が「桜の開花前線」などという名称で発表しています。どうして開花時期を予想することができるのでしょうか？桜の花の芽ができるのは前年の夏頃。でも、この芽は

すぐには芽吹きません。芽吹くためには、冬の低温に一定期間さらされる必要があり、これを休眠打破といいます。何度以下の寒い日が続くと休眠打破にいたり、その後、暖かい日がどれくらい続くと花芽が生長し開花するか・・・などを過去の記録から調べ、今年の気温データや今後の長期的な予報などを参考にコンピュータで計算することで、開花日を予想しています。簡単な計算方法もあります。2月1日から毎日の平均気温を足し算して、合計が400度になると桜が咲くと言われていています。これなら皆さんでも予想ができるかもしれません。桜の開花予想はやめたものの、気象庁では開花日と満開日の発表は続けています。各地の气象台では観察する対象の木・標本木を決めており、5～6輪以上の花が開いた日を開花日、約80%以上のつぼみが開いた状態になった日を満開日としています。桜の開花は早まる傾向にあり、昨年平年値が見直された際にも、ほとんどの気象官署で1～2日早くなりました。桜の開花の様子からも、気候変動を感じられますね。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

📠 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

